

「漢字で言葉の力や子どもの個性、やる気も伸びている」

石井式能力開発教室 東京・恵比寿教室
五歳児のお母さん 麻布三希子さん

息子が教室に通いはじめたのが二歳半くらいのときからですので、もう三年半くらいになります。

男の子のほうが言葉が遅い」というようなことをよく言いますし、うちは主人と私、息子の三人だけの家族で、始終家の中で会話が飛び交うという環境ではありませんでした、ですから、だんだん言葉の問題を意識するようになって、すぐ近所にあったこの教室にお話を伺いに来たのが最初のきっかけです。私自身、以前から国語や俳句、古典といったものにとっても興味をもっていたので、子どもと一緒に楽しめれば、という思いもあって入会を決めました。

とはいえ、実は教室に通い出した最初の頃は、まだ幼かったこともあって、子どもが授業中、椅子にじっと座っていられず、ちょっと外で音がすれば立ちあかつて窓の外を見に行ってしまう、というような時期がありました。

そんなとき、先生は決して無理に子どもを連れ戻そうとしないだけでなく、私にも「手や を出したりせずに座っていてください、そうすれば、その姿勢を見て、今は座っているのが大事なのだということが、お子さんにもわかりますし、お母さんが楽しんで漢字に接していれば、

お子さんも必ず興味をもってくれます」とおっしゃって、私だけが先生に続いて本を読んだりしていたこともありました。

その間、せっかく来たのにちっとも子どものためになっていないのでは」と、不安になることもありましたが、実際、一ヵ月、二ヵ月と続けていくうちに、いつの間にか子どももきちんと椅子に座って、先生のお話をしっかりと聞けるようになっていました。

そのとき、先生がおっしゃってくださった言葉は、今でも私の育児のうえでの心の支えになっていて、私自身、しつけの基本なようなものを教えていただいたような気がしています。

息子のほうも、授業に集中できるようになるにつれ、漢字に対する興味がどんどん湧いてきたようで、三歳ぐらゐのときから、私が新聞を読んでいても隣からのぞきこんで「あ、この字、知ってるよ」としきりに話したがるようになってきました。

一度、天気予報欄に載っている地名の読み方を聞かれたので、一つずつ教えてあげたら、翌日には自分で新聞を広げて「鹿児島は晴れだね」なんて言うんです。街を歩いているとき、看板や標識に知っている漢字があると、別々に習った漢字の組み合わせでも自分で考えて読んでしまったり……、そんな子どもの能力の高さには、ほんとうにびっくりさせられます。

それに、絵本や俳句などでさまざまな言葉に触れているせいか、同じ年頃のお子さん比べると、語彙が豊富で、同じような意味の言葉でも、そのときどきで「走る」「駆ける」「駆け出す」など、違った表現

をしたりします。使い分けは必ずしも正確でないときもありますが、今はまだ、それをとやかく言うのではなく、まずは豊かな表現を少しずつ身につけていってくれればと思っています。

家でも、教室の教材の絵本を読んだり、漢字カードでゲームをしたり、あとは俳句や諺のカルタをしてよく遊びます。特にカルタ取りは大好きで、一度やると、もう一回、もう一回という感じです。

はじめは、もっぱら私か読み手で、子どもは札を取る役ばかりやっていたのですが、この頃は、読むほうも十分できるようになったので、主人が家にいるときは交代で読み手を担当して、残りの二人が対戦したりしています。子どもは教室でお友達ともしょっちゅうやっているの、札を取るのも速いのです。

教室に通うようになってから、子どもは内面的にもずいぶん成長したような気がします。たとえば、何事にも物怖じせずに積極的に取り組めるようになったり、あるいは、興味があることに対して「どうしてなんだろう」「なぜだろう」と自分か納得するまで掘り下げて考える姿勢であるとか。

そういう面でも、単に漢字を教えるというのでなく、子どもの個性ややる気をその子の性格に合わせて引き出してくださった先生方には、感謝の気持ちでいっぱい、小学校に入ってから、本人が教室へ行くのを楽しみにしている間は、ずっと続けさせたいと思っています。